



いずみさの昔と今 第254回

「苦心と挑戦の果てに〜泉州たまねぎの誕生〜」

「泉州たまねぎ」と言えば、その名のとおり泉佐野市を含む泉州地域において盛んに栽培されている特産品のひとつです。しかし青果店などの店頭でよく普通に販売されている「泉州たまねぎ」は、多くの人の努力によってその地位を獲得し、現在に至ったものなのです。

日本に初めてたまねぎが輸入されたのは、明治4年のことです。泉州地方にたまねぎが入ってきたのは、明治15年に日根野郡役所の勸業委員をしていた坂口平三郎が、自宅農場でその栽培に成功したことがはじまりと言われています。

明治18年に田尻町の勸業委員で篤農家の今井佐治平が坂口宅に集まった際、栽培されているたまねぎを見て、その栽培と定着を試みることを考えます。この頃、明治16年に大干ばつが泉州地域を襲い、明治17年・18年には大雨による大洪水が大阪を襲いました。米をはじめ泉州地域の重要な商品作物である綿・甘蔗（サトウキビ）・菜種なども大きな被害を受け、多くの農家は悲惨な状況に陥りました。佐治平は、それらに代わる新し

い商品作物を探し求めていたのです。その後、佐治平は坂口にたまねぎの種子の取り寄せを依頼し、手に入れた種子の栽培を息子の今井伊太郎に任せます。

伊太郎は、父佐治平や大門久三郎、道浦吉平から指導を受けながら懸命にたまねぎを育て、泉州の風土にあった品種への改良と栽培の定着化に成功します。

しかし、当時の日本にとって馴染みのないたまねぎはなかなか売れず、伊太郎の頭を悩ませました。そんな折、明治26年に大阪で伝染病（赤痢・コレラなど）が流行します。たまねぎがコレラの特効薬になると噂がたつと人びとが買い求めるようになり、思わぬきっかけで受け入れられていきました。

また、保存がきくというたまねぎの特性を生かして神戸を通じて海外へ輸出を行い、販路を広げていきました。その後、日本の食卓も西洋化が進み、たまねぎが料理に使われるようになります。稲作の裏作（米を収穫したあとに、別の作物を栽培すること）として最適なたまねぎ栽培は泉州地域で普及し、大正期から昭和初期には泉州たま

ねぎの全盛期を迎え、泉佐野市においても重要な特産品となりました。大正2年に春日神社（田尻町）の境内に「泉州玉葱栽培之祖」の石碑を建て、その偉業を今に伝えていきます。

当館特別展示室にて先月28日から開催中の冬季企画展「道具今昔」では、さまざまな昔の道具を展示し、道具に込められた先人たちの知恵や当時の暮らしの様子を紹介しています。たまねぎ栽培に使われた道具も展示しています。ぜひご来館ください。



▶たまねぎ小屋

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日 月曜日、祝日（祝日が月曜日の場合はその翌日、日曜日の場合はその翌々日）
開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
入館料 無料

消費生活センターだより

見守りリー→
相談受付 午前9時～午後4時30分
相談はお早めにセンターへ!!
南海線「泉佐野」駅前 ☎469-2240

スマートフォンのセキュリティー

スマートフォンはパソコンと同様にインターネットに直接つながり、携帯電話用のメールもパソコンのメールも使えます。

画面にアプリケーション（アプリ）のアイコン（絵柄）を、指で触ると機能が使用できます。

小さな画面がゲーム機にも本にも、アルバムなどにもなるので、一台で何役もこなします。つまりスマートフォンは小型のパソコンに電話機能が付いたものと言えます。

しかし、スマートフォンには、アドレス帳、メールや写真などが入っているので、外部からの不正アクセスや不注意からのデータ流出などのリスクを最小限に抑える必要があります。

- まず。
- ① 日頃から紛失・盗難時に何をするべきか事前に確認しておくことが大切です。
- 【紛失・盗難時には】
- ① 端末の遠隔ロックや位置情報検索機能を利用して端末を探す
 - ② 携帯電話会社に連絡し通信回線を停止する
 - ③ 警察署への届け出
 - ④ ICカード機能提供会社などへの連絡
 - ⑤ 紛失した可能性のある場所や施設に問い合わせる
- 【口頭からの備え】
- 普段から所有者自身で設定できる端末のロック機能などを活用するとともに、携帯電話の紛失時などに利用できるサービス・機能や、端末補償などのサービス内容を調べ、必要に応じて加入または、登録をおさしましょう。
- また、日頃から端末内に保存してあるデータのバックアップを取っておくことも重要です。
- スマートフォンを使わない時はロックすることを心がけ、職場や学校、公共の場などでは、不用意に他人の目の届くところに放置しないようにしましょう。